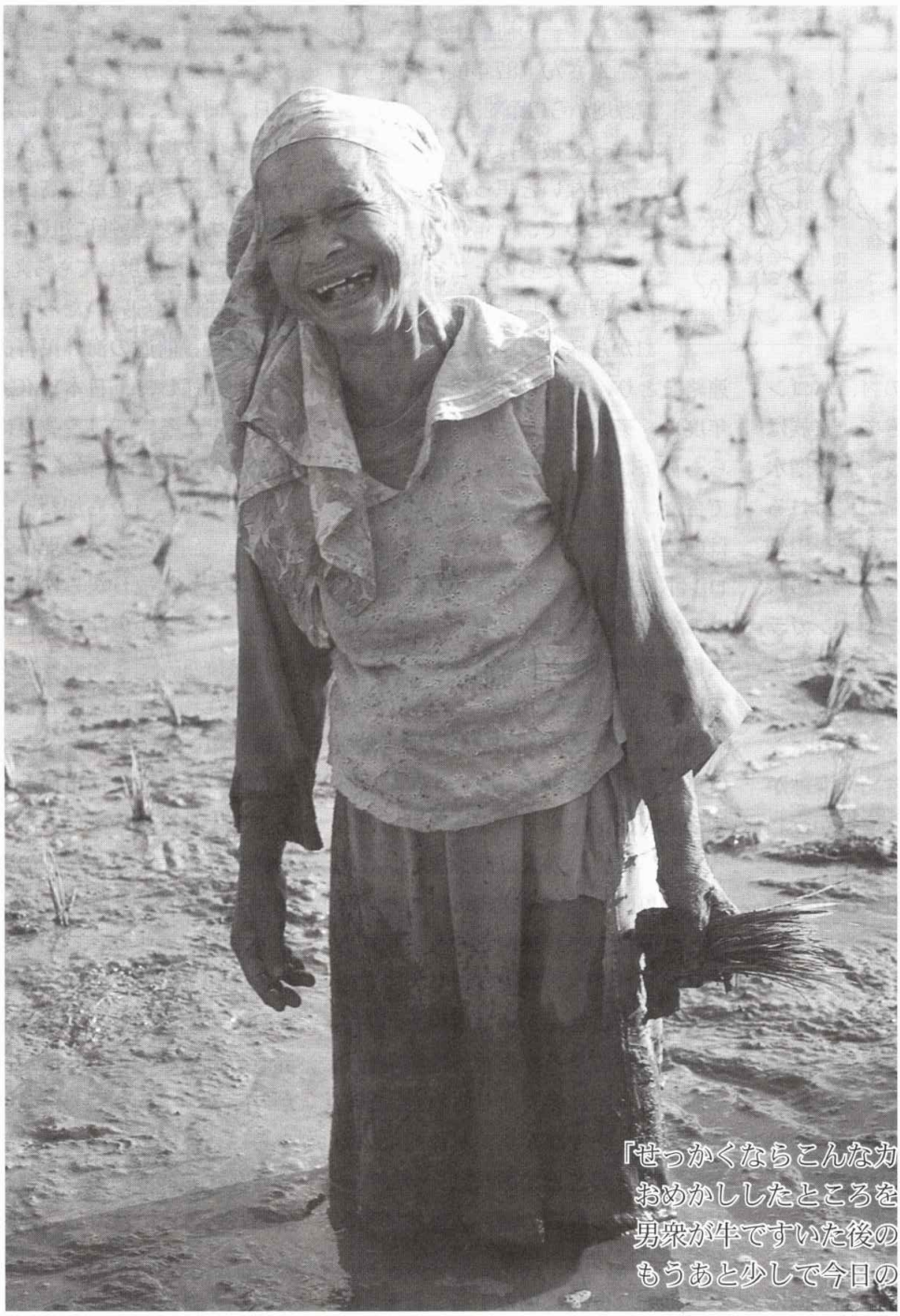
PHD LETTER 94
PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT
2005.3

- ソディ通信 ・・・ P.3
- 研修生レポート ・・・ P.4－5
- 私たちが変わるための試み⑧ ・・・ P.7

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり（Peace）健康づくり（Health）を担う人材をつくる（Human Development）運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発　行：　財団法人PHD協会　理事長　今井　鎮雄
編集人：　藤野　達也
住　所：　〒650-0022　神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892　FAX 078-351-4867
Email：　phd@mb1.kisweb.ne.jp
URL：　http://www.kisweb.ne.jp/phd
定　価：　100円
郵便振替口座：　財団法人ピー・エイチ・ディー協会
01110-6-29688



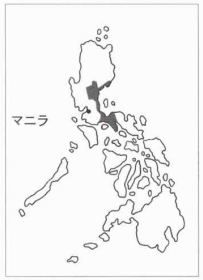
「せっかくならこんなカッコじゃなくって
おめかししたところを撮ってほしいのに。」
男衆が牛ですいた後の田植えは女衆の役割。
もうあと少しで今日の分はおしまい。

インドネシア、西スマトラ州タベ村　撮影　FUJINO T.

東西南北 問題解決 取組日記

ハイティさんの家族も避難

年末のスマトラ沖地震・インド洋の津波の被害の大きさに吹っ飛んでしまったが、11月末にフィリピン、ルソン島を季節はずれの台風が襲い、大きな被害がでた。今期研修生ハイディさんの村があるヌエバエシーハ州、オーロラ州、ケソン州の被害が特に大きかった。昨年の研修生アンディさんの携帯電話に何度か連絡を入れ、やっと話ができた。ハイディさん、アンディさんの村、バゴンシカットでは腰まで水がきて、家族は山の村に避難をしたという。急な増水ではなかったようで、人命が失われることはここではなかったが、鶏や田畑に大きな被害がでた。夏のツアーの時に豆腐作りの見学で訪ねたディンガラン町では、谷に位置する集落が鉄砲水でやられ、家が流され人命が失われた。



こういった事態に対し、フィリピン政府や民間団体、日本を含めた海外からの救援物資を中心とした支援が行われた。私たちはフィリピンにおけるカウンターパートの団体SAFRUDIと連絡を取った。その時点では物資はある程度行き渡っているとのことだったので、アンディさん、ハイディさんとも相談をし、PHDからはすぐにというより、少し時間が経ってから村の復興に協力できるのではと、次回訪問時に村の人と一緒に相談することになった。

研修生の村は無事でした

スマトラで地震発生、そして各地に津波の報を聞き慌てた。ちょうどタイにスタディツアーをだしていたが、こちらは山なので心配はない。もっとも被害の可能性があるのは西スマトラ州の漁村の研修生たち。地震翌日、州都パダンでPHDの窓口となってくれている大学の先生シャリフ・アリさん宅に電話を入れた。こちらのお宅も海岸から数十メートルのところにある。電話がつながったのにまず一安心。そして話を伺うと大きな揺れもなく、津波もないとのこと。この時点ではかえって日本の方が情報量は多かったぐらい。

続けて最近電話が引けた漁村パシルパルーの研修生アリ・ムルティムさん（87年度）と話す。震源地からの距離は遠くないが、目立った被害はないとのこと。一番危ないと思った村が大丈夫だったので、今年の研修生アフリタさんたちのところは山村だから問題ないと判断できた。それからスリランカの研修生とも連絡をとり、ニーラカンティさん（87年度）、アジャンタさん（88年度）からも被害はなかったことを聞くことができた。ニーラカンティさんのところは内陸だが、アジャンタさんは今はコロンボに近いところに住んでいる。近くの海辺の村には被害が出ているので、食糧を届けるなどできることを手伝っているとのことだった。

PHD協会はご存知の通り、緊急救援に重きを置く活動ではない。十分な体制やカウンターパートをもたないところで動いても、効果は高くない。この状況は専門の団体や規模の大きな支援活動に託すことが賢明と考え、私たちは周辺の動きへの側面支援でいくこととした。会員さんからは研修生の安否確認、何かできるかと言った問い合わせが年末年始に多く寄せられた。研修生の無事を伝えながら、具体的な協力がしたいとのことであれば、メンバーになっている神戸の海外災害援助市民センターにつないだり、研修生を通じた長期的な復興に協力することをお伝えしてきた。

島根県川本町でゾーウィンさんの農業研修を引き受けてくださった中川さんから連絡があった。息子さんがタイのピピ島でダイビングのインストラクターをしていて、津波が来た時も沖で潜っていたという。沖にいたことがかえって幸いしたのか、無事だった。戻った浜の惨状に何か手伝えないかとの思いに応え、中川さんたちが街頭にも立ち、お金を集めた。それをどう使うかについてのお尋ねの電話だった。どこか大きなところへ託すことも案のひとつにあったが、せっかく息子さんが現地におられるのならと、現地の見えるところに協力することをお勧めした。後日、伺うと、被災地域の学校の子どもたちの支援に使っておられるとのことだった。また岐阜県高山市の水谷さんからは、製薬会社に知り合いがいて、おなかの薬を提供してもらえるのだが、どこに届けたらいいだろうかとのお問い合わせ。前述の海外災害援助市民センターを通じて、日本YMCA同盟を紹介したところ、スリランカに協力することになったと聞いた。

一月中旬に当会も加わっている関西国際交流団体協議会の理事会があり、この災害への取り組みについて話し合った。いくつかの団体は独自のチャンネルを持ち、そこを通じた支援の報告があった。議題は協議会全体としてどう取り組むかであった。たくさんの報道によりそれなりに市民からの反応がある今より、この勢いの冷めた頃、いわゆる募金キャンペーンの盛り上がりが衰えた頃からが、小さなNGOの活動の役割が重要になるのではなかろうかと発言をした。国連、政府レベル、また大手民間団体による緊急救援とは違った役割を、少し時期が経ったときから行っていく必要があるように思う。さらに言えば、この災害が起こる前から存在する各地の多くの課題、問題は解決したわけではない。津波のニュースによって忘れ去られてしまっただけである。目の前の大災害への支援だけでなく、それ以前から存在する問題への取り組みが続いていくことも大切だと思う。　　総主事代行　藤野達也

ソディつうしん 35

1年ぶりの訪問
(2004年10月3日〜12日)

農業を主な収入源として生活をしている彼らにとって、収穫期以外の収入として、また教育費や医療費など近年支出が増えている中で、副収入は大きな意味を持つ。伝統的な技術を用い、地域で生活向上を目指す布グループに賛同し応援してきた。今回の訪問時、メーホンソン県にあるルチョコグループの元研修生ブンシーさん（2000年度）からある提案がされた。元々クリスチャンだったブンシーさんは6月からキリスト教の勉強のためチェンマイの学校に通い始めた。

ブンシーさんの熱い思い

「ミーティングを開いても参加するメンバーは少ない。自分が上手に話しができたら参加者は増えるかも。また、みんな自分のことばかりで他人を思いやることができない。キリスト教を勉強し、布グループの活動を通し他人を思いやる心を伝えられたらと考えて学校に通うことにした。日本では自分たちでがんばることを学び、今学校では困っている人を助けることを学んでいる。その学びの中から、現在のグループ活動がPHDの目的に合わなくなっていると感じた。買い付けを段階的に減らして関係を見直した方がいい。私自身はPHDと私たちにとって、品物を買ってもらうことではなく、友情というつながりが一番大切なのだと考えている。このつながりを大事にしていきたい。ずっといい関係が続いて欲しい。」

空回りの原因は私？

これまでの応援は依存にならぬよう買い付け金額を上げず、タイ国内のマーケティングへのかかわりも自主的な動きに任せてきた。村人自身が自分たちの生活の中で解決策を考え、取り組むことが必要だと考えてきたからだ。自分たちで動かなければ何も変わらない。私はミーティングのたびにこのことを伝えようと繰り返してきたが、空回りすることの方が多かった。ブンシーさんの成長に自分自身を振り返らずにはいられなかった。研修生に日本で研修した技術を生かすこと、村人に信頼され活動に賛同してもらえるような人間になることを期待し、自分を違う次元に置き、相手が変わることばかりを求めていた。

よい関係とは…

よい関係を続ける、つながりを大切にするためにはお互いの成長が必要である。研修生の成長や活動の環境が整うまで待つと言うだけでなく、私たち自身が変わる、成長しなければならないことがある。自分の足元で家族また社会の一員として生活者として自分自身と向き合い人間的に成長すること、さらに伝える・聞くことのコミュニケーション能力を高めること。家族や友人、職員、ボランティアの方との関係を大切にし自分自身の成長を心がけたい。カレンのおばちゃんたちと肩を並べて歩ける自分を夢見ながら…。

（古本妃留美）

「枝打ち」は地球を救う……!?

芳田裕二さん

昨年11月に恒例の林業体験合宿「枝打」を行った。日本林業の難しさや新しい動き、海外での違法伐採の問題などをこれまで伝えてきたが、今回はこのプログラムに10年来関わって下さっているボランティアスタッフの芳田祐二さんに、今の思いを語ってもらった。

環境問題に関心を持ち、参加した林業体験合宿。回を重ねる度に学んだことがたくさんありました。

まず、「自然環境を守る」と一口に言っても、その人の立場によって一様ではなく、むしろ千差万別と言っていいほど違いがあるということでした。そもそも杉や桧の「畑」である植林された山を守ることは「自然環境の保護」なのか。しかし、その杉や桧の「畑」が世話をする人もなく荒れ放題になって、そのような山の整備が緊急の課題となっているのが現実です。

そのように荒れた山は零細な山主さんの所有であることが多いのですが、林山地の大部分は国有林で、ついで多いのが大地主さんの所有地です。この二つをあわせると日本の林山地のほとんどを占めています。とすると零細山主さんが所有している荒れた杉・桧の「畑」という問題は面積から考えると微々たる問題ということになってしまいます。

多くの山主さんは、自分の山の木が高く売れることが望みです。売れない広葉樹などは「雑木」で必要ないわけです。しかし、山に住む鳥や獣や虫たち、川や河口の海に住む魚たちには多様性に富んだ森が必要です。その折り合いをどうつけるのか？私はマチに住む住人で、山主さんからすれば所詮よそ者でしかありません。しかし山の恵みは川の流れを通じて町を潤し、都会の生活に大きく関わっているのです。自分の国の森を上手に管理することもできない日本人が、東南アジアをはじめとして、世界中の森の木を切りまくり、紙や合板の原料としている現実。その上に乗っかった私のそれなりに便利な生活…。どれ一つをとっても、なかなかに答えを見つけることのできない難問です。「枝打ち」がその答えを見つける糸口にきっとなる！…といいなあといつも思っています。

22期生
10月中旬～２月下旬

ハイディ・マルセロ・マリアーノさん（フィリピン、女性、25才）

－保健衛生・農業研修－
13. はらっぱ保育所（兵庫県西宮市）
　前田公美（滞在／同市）
14. 波賀みどり保育園（波賀町）
15. 波賀町立野原小学校（同町）
　小林盛司・喜美子（滞在／同町）
16. 特別養護老人ホームかえで園（同町）
17. 波賀町社会福祉協議会（同町）
　中村一日郎・庸子（アレンジ・滞在／同町）
　田中とみ丞（アレンジ／同町）
18. ふえろう村塾（小野市）
19. 小規模作業所ステップハウス（高砂市）
　高砂にPHD研修生を迎える会
　（神吉道子、西村利也・慶子）
　（アレンジ・滞在／同市）
＜敬称略＞

ゾーウィンさん（ビルマ、男性、35才）

－農業研修－
11. 泉精一・嘉代美（愛媛県中島町）
12. 西川則孝・文抄子（西条市）
13. 中野宗嗣・美恵子（兵庫県丹波市）
14. ふえろう村塾（小野市）
－農機・メンテナンス研修－
15. 寺田まさふみ・和美（出石町）
16. 西日本三菱農機販売 篠山支店（篠山市）
＜敬称略＞

アフリタ（通称リタ）さん（インドネシア、女性、20才）

－保健衛生・保育・洋裁研修－
11. 東出雲町保健相談センター（島根県東出雲町）
　米田祝子（アレンジ・滞在／松江市）
　金本勉・すみ子（滞在／東出雲町）
12. シオン保育園（西ノ島町）
　大野光信（滞在／同町）
13. 小規模授産所ございな、西ノ島町社会福祉協議会、西ノ島町役場（同町）
　佐倉真喜子（アレンジ・滞在／同町）
14. 太陽保育園（兵庫県養父市）
　室見千尋・邦男（滞在／同市）
　岸政次郎（アレンジ／同市）
15. くらふと・ぎゃらりー多田（芦屋市）
16. 臼井由江（丹波市）
　春日町国際交流協会（足立洋子、荻野澄尋、三宅安子、加賀野幹男）
　（アレンジ・滞在／同市）
17. 高橋武子（三木市）
　福永隆昭・就子（滞在／神戸市）
18. くらふと・ぎゃらりー多田（芦屋市）
19. 岩佐康子（姫路市）
20. くらふと・ぎゃらりー多田（芦屋市）
＜敬称略＞

＜共通研修＞
2. 旅路の里（釜ヶ崎の歴史と現状／大阪府大阪市）
3. 明石協同歯科（口腔衛生研修／兵庫県明石市）
4. 淡路島モンキーセンター
　（残留農薬の弊害等／洲本市）
5. 山口勝弘（有機農業・果樹／南あわじ市）
6. 兵庫六甲農業協同組合
　（協同組合の仕組みや運営／神戸市）
＜敬称略＞

＊東・西日本、県内研修旅行での訪問先は、別紙に掲載しております。

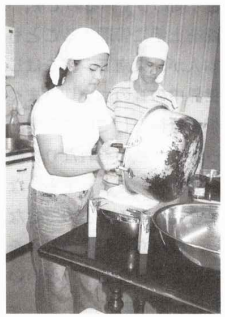
フィリピン短期研修生

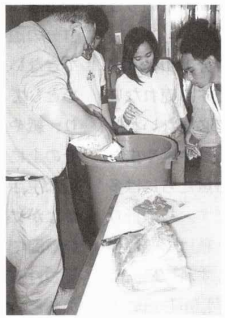
サミーさん（男性、31才）
ジェシカさん（女性、21才）

昨年の10月4日～25日にはハイディさんの出身地域から２名の青年を招き、日本の有機農業の歴史や現状、基本的な技術と農産物加工を中心に研修してもらいました。日本語の上手くなったハイディさんが通訳及び“先輩”として同行。しっかりと彼らの研修をサポートしてくれました。

＜研修内容・研修先＞
1. 大豆加工…尾崎食品（兵庫県神戸市）
2. 有機農業…橋本慎司（丹波市）
3. 有機農業・農産物加工…大森昌也（和田山町）
4. 農産物加工…寺田まさふみ（出石町）
5. 有機農業・豚肉加工…ふえろう村塾（小野市）
6. 有機醤油蔵元見学…足立醸造（加美町）
7. 醤油工場見学…ヒガシマル醤油（龍野市）
8. 土着菌利用の土作り…真柴三幸（南光町）
9. 醤油蔵元見学…秦組本店（南あわじ市）
＜敬称略＞

３週間という限られた期間ではありましたが、常に３人で帰国後の具体的な活動を話し合いながら研修することができ、ハイディさんは「同じ事をしようとする仲間が増えて心強い」と話していました。

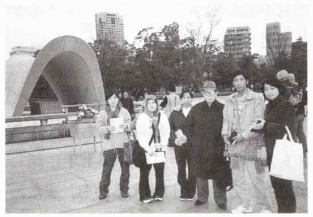

豆腐作りに励むジェシカさんとサミーさん（神戸市）


ベーコン作りにも興味津々（小野市）

研修生レポート

平和を想う

今年の西日本研修旅行では、久しぶりに長崎県を訪れることができました。主な目的は、平和学習と諫早湾干拓事業見学の２つ。長崎の原爆資料館では、研修生一人ひとりに私たちがついてゆっくりと館内をまわることができました。たくさんの質問をして熱心にノートをとるアフリタさん、今なお続く核実験に憤るゾーウィンさん、展示物を見て涙ぐむハイディさんの姿が印象的でした。それぞれ様々な戦争体験を親や祖父母から聞いている３人。戦時中の日本に対する複雑な思いが交錯しつつも、戦争の悲惨さ、平和の大切さを長崎と広島の地で確認しました。


語り部の久保浦寛人さんと（広島市）

長良川と諫早湾

日本の公共事業の仕組みや問題点を学ぶため、東日本研修旅行では長良川河口堰、西日本研修旅行では諫早湾干拓事業を訪問、見学を行いました。

どちらにも共通するのは、①事業目的に妥当性が見られないこと。②事業前には魚介類が多く生息した豊かな自然があったが、今では壊滅的な被害が広がっていること。③政・官・業の癒着により、問題解決に向けた誠意ある対応が見られないこと、などが挙げられます。

「私の国でも同じ問題たくさんあります！」と呆れ顔の研修生たち。理想と現実、おカネと環境など、バランスをとることが難しい問題があることやせめて自分たちの出身地域で同じようなことが起きないように村の人たちに日本の経験を伝えていくことの重要性を感じたようでした。

諫早湾を望む展望台にて（諫早市）

水俣を訪れて

水俣では、昨年度の国内研修生であった坂西卓郎さんが今年は水俣病センター相思社の職員として私たちの２泊３日の研修をお世話してくれました。

水俣病に関する基本的な知識や歴史の説明を受けたり、語り部の上野エイ子さんからは悲しみをこらえながら貴重な体験談を語っていただきました。また、胎児性水俣病患者の方々が通って、喫茶店や押し花のしおり作りなど地域に根ざした活動を行っている“ほっとはうす”を訪れ、メンバーの皆さんから生い立ちを伺ったり、しおりを一緒に作らせていただいたりと交流の機会を持ちました。研修生たちは、水俣病のために大変な苦労をされてきた方々が、一生懸命、前向きに生活されている姿に心を打たれたようでした。

今回初めて訪れたせっけん工場では、研修生のみならず日本人スタッフにも大きな学びがありました。

合成洗剤を入れた水槽の魚は３分後に死んでしまったのに対し、粉せっけんを入れた方では元気に泳ぎ回っている。見慣れた市販の歯磨き粉で歯を磨いた後オレンジジュースを飲んでみると味が変わり、せっけん成分の歯磨き粉を使用した後では味が変わらない。「驚きの白さに！」という洗濯用洗剤はただ蛍光増白剤で染めているだけ…など、ビデオや実際の実験を通して、合成洗剤がいかに環境を汚し、人体への影響など考えられていない安価な化学物質でできているかということをわかりやすく教えていただきました。

「合成洗剤はやめましょう！」（水俣市）

研修生たちの村でもよく目にするシャンプーやリンスが合成洗剤入りの方に分類されているのを見たハイディさんは「えー！Panteneも？Luxも？私の家族、村の人たちみんな毎日使ってますー！」とかなりショックを受けたようでした。

“豊かさ”を考える

テレビをつけると毎日のように子どもや未成年の若者が巻き込まれたり、起こした事件のニュースが流れてくる今の日本。日本語がかなりできるようになった研修生たちにもその異常さが伝わっています。

「日本の子どもは家の手伝いをしないでテレビゲームばかり」、「お父さん、お母さんも何でもすぐに買ってあげる。怒ったりしない」、「食事の時にみんなテレビを見て、家族で話をしない」など、彼らの目に不思議だと映っていることに問題の一因が見え隠れしているように思えます。

そんな中、今年度も釜ヶ崎を訪れ、その歴史やホームレスの方々を取り巻く現状を学んだり、炊き出しや夜回りのボランティアに参加してきました。やはり今までの研修生と同じように、「なぜ、家族や親戚に電話すらできないのか」という点がなかなか理解できない様子でした。研修生たちは、経済的な豊かさが必ずしも心の豊かさを保証するものではない、という事実を肌で感じることとなりました。

私たちも、目の前のホームレスの方々や自ら命を絶っている方が３万人を優に超えているという現実には目を向けずに、「やれ、国際協力だ！海外援助だ！」と叫んでいるといつか足元をすくわれるような気がしてなりません。

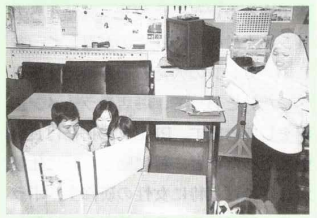
３月中旬には、それぞれの出身地域へと帰っていく研修生たち。その活動を長い目で応援しながら、私たちも身近な問題に目を向けて、本当の“豊かさ”とは何か、どうすればお互いの地域をより良くしていけるか、を彼らと一緒に考えつづけていかなければ、と思います。

（納堂邦弘）

研修生は歯がいい！？ －最終回－
（インドネシア・タベ村編）

これまで４回にわたってタベ村の虫歯の問題を様々な角度から見てきましたが、今後のPHDの方針としては、協同歯科の黒田耕平先生もご指摘の通り「今すでに虫歯がある人たちの治療を考えるより、予防に重点を置き、できるだけ小さいうちから歯磨きの正しい習慣を身に付けられるように指導していく方がいい」だろうと考えています。

こうして協同歯科での２度目の研修では、虫歯の原因になる食べ物をバイキンくんが喜ぶかどうかで分かり易く伝える「バイキンくんの家」という寸劇のやり方を教えてもらったりしました。「村の実状に合わせて上手に村人（特に子ども）たちに虫歯の原因や歯磨きの仕方を伝えていくことが大切。地道に頑張って！」と先生方からエールを受けた研修生たちは、それぞれの言葉での「バイキンくんの家」の上演に意欲を燃やしていました。


「バイキンくんの家」の上演中（明石市）

“自分”育て

国内研修生
佐藤栄利子さん

国際協力という分野に研修生という形で携わるようになり、その意味の深さを考えはじめ、他国に対して何の手助けができるかということよりも、私自身の生活を見つめ直すことに重きを置くようになりました。特に、昨年は国内外で災害が起こり心が痛みますが、その原因を作っているのは私たち人間で、考えなければならないのは地球に優しい生活、忘れてはいけないのは自然に生かされているという感覚だと思っています。豊かさという定義は難しいですが、経済発展の裏側にある日本社会の問題が、こんなにも身近に、しかも現在進行形であるということをPHDでの研修を通して知り、本当に複雑な思いです。一昨年参加したタイでのスタディツアー中に、そして今、研修生と時間を共有しながら「何かお手伝いをする」というのではなく「私が忘れかけている豊かさを教えてもらう」という姿勢で関わることが大切なのではと感じています。

10月からの研修は、本当に学び多き日々で、自分の無知を再確認しながらたくさんのことを教えて頂いています。職員の方々、研修生、そしてPHDを支えて下さっている皆様方との出逢いの中で、私自身が持っておきたい軸を気付かせてもらっているように思います。

神戸で新しい生活を始めるということは、私にとってはとても大きな一歩でした。ここにこなければ立ち止まって考えることもなく、また、触れることができなかったものに包まれて生活できている状況を心から有難く思っています。踏み出すことでこんなにも自分が変われるのだということを楽しみながら、毎日盛りだくさんに過ごしています。良くなることに対する努力を怠けず、大切なことを見極める目をこれからも養っていきたいと思っています。

帰国研修生短信 <タイ>

◆ワラヤさん（88年）

今年は水が多く、お米が良くできました。お寺でのボランティアや、女性グループ等の活動もしています。村の学校で政府から補助金を得て、５ヵ月間英語、数学、タイ語を教える予定でしたが、政府から未だにお金が届かず、まだ始まっていません。

◆プラチャクさん（98年）

新居を建築中で、敷地内には井戸が２つ、養殖池用地と小さい畑もあるので、新居に移り子どもがもう少し大きくなったら、野菜を作りたいそうです。

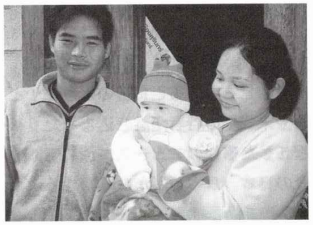
◆プリチャーさん（85、94年）

食料品や雑貨のお店を経営しています。親せきがラーメン工場を建設中で、ラーメンを作ったらプリチャーさんの店で売る予定だそうです。「私たちカレンの人は仕事に就くのが難しく、貧しい。カレンの人たちのために仕事を作りたいと思って、お店やラーメン工場をしています。PHDでの研修は良い勉強だったけど、村に帰った時に仕事がなければ（特に女性の研修生）ボランティアでいろいろと教えるのは難しいです」と話していました。

◆アンポンさん（97年）

養鶏をしていましたが、鳥インフルエンザの影響で５月にやめました。処分の際の政府からの援助は一羽40バーツ（１バーツ＝約2.7円）で、移動制限があるので新しいヒヨコを街で買うことができないそうです。

◆ナロンデッさん（01年）



昨年９月に女の子が生まれました

にんにく、ナス、チンゲンサイ、タマネギ、たばこの葉を自給用に作っています。米、大豆は販売用にも。９月に中古の脱穀機を購入（７万バーツ）。家の隣に養殖池を作り、ナマズの稚魚を購入しましたが、寒さのためか、たくさん死んだそうです。

農業の他に、ビルマ国境付近の山で象のお世話をする仕事もしており、そこでいろいろな人と出会います。「国境周辺に住むカレンの人たちの生活は自分たちよりも大変。人々の生活改善に取り組んでいるNGOが近くの町にあるので、その団体の活動にも興味があります」と話していました。

◆スラチさん（02年）

前回の訪問時にはナスの契約栽培をしていましたが、後日、業者に化学肥料を使わないと作物を買い取らないと言われ、化学肥料を使うと畑の土が悪くなるので、すぐにやめたそうです。

今はにんにく、タマネギ、ナス、みかんを作っています。みかんは豊作でしたが、昨年は4000kgできたお米が、今年は雨不足で1500kg。自給用にも不足するかもしれません。2日に１回は井戸から水を汲み、野菜に水やりをしています。ポンプを借りると、日中は300バーツ、丸１日は600バーツとガソリンが５～６ℓ必要です。

大豆の殻で堆肥作りもしており、積み上げてから30日で白い菌がつき、40日でおいしいキノコも生えてきます。３ヵ月程で使えるようになるそうです。

鶏は２羽だけで、鳥インフルエンザのこともあるので、増やすことは考えていないとのことです。

私たちが変わるための試み ⑧

水俣から発信する“じゃなかしゃば”

～水俣の言葉でオルタナティブの意～

水俣病センター相思社
坂西卓郎さん

昨年度の国内研修生の坂西さんにインタビューし、前号では水俣にたどり着くまでのいろんな思い、水俣での生活について掲載しました。その続きをご紹介します。

編集部（以下編）：ゴミの21分別をやっているというお話でしたが、大変ではないですか？

坂西さん（以下敬称略）：う～ん、それが思った程大変でもないんです。例えば海も川も近いので、台所で流す油やしょうゆがどこに行くのかがよくわかるんですね。水俣では下水道がきちんと整備されていないので、それこそ直接海へ流れていって自分達の海や川が汚れるということが理屈ではなく実感できる。そういった距離感だと自然と生活に気をつけて生活できるのでそんなに大変だとは思わないですね。

神戸に居た時にはゴミは収集日にまとめて出せば消えていくし、生活廃水もどこに流れていくのかよくわからなかった。想像力の不足とも言えますが、自分の食べるもの、捨てるものに責任を持って生活していくには、どこから来てどこへ行くのかが見えるというのは大切だと感じました。今のグローバリゼーションのミソはそういったことをできるだけ見えなくする、ということだと思います。生産と消費の間の距離をとることによって、わからなくさせている。だから消費者は安いものだけを求めてしまうんですよね。

編：目に見えない部分をいかに想像するか…。21分別が始まったのはどうしてですか？

坂西：最初は財政的な事情からだったんですが、どうせやるなら「水俣病を経験した水俣だからこそ徹底した循環型社会を目指そう」ということで、93年から資源ごみの分別が始まり、段階的に増えて今は21分別に落ちついています。「捨てればゴミ、分ければ資源」ですね。でも、ごみ分別の最大の成果は、ごみの再資源化ではなく、水俣市民が水俣という地域に誇りを持てるようになったことだと思います。「水俣病の水俣」と言われ出身地を言えない、結婚・就職差別を受ける、という状況があった。でも、徹底した分別をすることで、外から人が見学に来るようになった。そうすると「なんだか自分達のやっていることはすごいことらしい」と思い始める。いろいろと質問されるから答えないといけない。自分達のことを語ることによって誇りを取り戻してきました。それとゴミは月一回約20世帯単位で集まって分別するんですが、共同作業をすることによって地域の会話も復活しました。「井戸端会議」ならぬ「ゴミ端会議」ですね。

編：ゴミ分別にもいろんな側面があるんですね。今年もPHDの第22期研修生が水俣病のこと、水俣の現在のことを勉強させてもらいました。

坂西：楽しかったですね。研修生の受け入れは「水俣まち案内」という活動で、「水俣病を伝える」活動の柱の一つ。高校の修学旅行やJICAも来ます。水俣湾の埋立地やチッソ[1]が排水を流した排水口などの水俣病の現場、水俣の海や自然を案内しています。内容はマニュアルなんか無いんで、それぞれの職員の経験や知識、感性で案内しています。だからメニューも、水俣の豊かな自然で遊ぶ、魚を食べる、漁船に乗って漁をする、お茶を摘む、水俣病患者の話を聞く、あるもの探し[2]をするなど人や季節によって様々です。話を聞くだけでなく、手や体、舌で水俣を感じてもらいたい。なぜなら水俣病の経験が持つメッセージは、被害を語るだけでは伝わっていかないと感じているからです。できるだけ楽しく考える素材を提供していきたいですね。

編：坂西さんの今後について聞かせて下さい。

坂西：そうですね、いま出月という地区（患者激発地域でもある）に住んでいるんですが、もっと地域に入っていきたいですね。先日、自治会の役員改選があって、そこでリサイクル推進員[3]に選ばれました。相思社の職員は目立つんですよね。地域では異色な外部者ですから、常に視線を感じます。でも、完全に地域に同化することを目指すのではなく、外からの視点で地域の人が言い難いことも言っていきたい。相思社の機関紙は「ごんずい[4]」という名前なんですが、「雑魚でもいいから毒を持って発信していく」というのがテーマです。毒が強すぎてもいけないけれど、毒をなくしてしまっては、相思社も職員も水俣に居る存在価値が無くなってしまう。特に水俣では「ニセ患者」発言はまだまだ根強い。そういった時に多少嫌な顔をされても、きちんと自分の意見を伝えていく。自分なりの姿勢で地域の人と向き合って良い関係を築いていきたいですね。

それと研修生に水俣病を伝えるのは相思社としても意義深い活動ですが、個人的にはもっと日本の人にも水俣を知ってもらいたいですね。PHD協会で水俣フィールドツアーをやりませんか？

編：そうですね。ぜひともやりましょう。

坂西：このインタビューで伝えきれなかった魅力が水俣にはまだまだいっぱいあります。やっぱ夏がいいですね。うん、ぜひ一緒に水俣で遊びましょう！

編：楽しみです。よろしくお願いします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

①**チッソ**：水俣病の原因となったメチル水銀を36年間にわたり流し続けた企業。
②**あるもの探し**：地域に「あるもの」に目を向けることで、住民自身が自己のアイデンティティを取り戻すことを目指している。
③**リサイクル推進員**：市から委嘱されたボランティアがごみ分別などの指導を行う。
④**ごんずい**：ナマズの仲間でごんずい球という群れを作る魚。背びれと棘に毒を持っている。

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

2004年10月	58件	8,982,120円
11月	124件	1,908,485円
12月	707件	5,282,573円
2005年１月	167件	2,611,266円
	1,056件	18,784,444円

会費に加え、年末募金のお願いにお応えいただき、心よりお礼申し上げます。皆さまのお支えにより、研修生は日本での研修を終え、３月７日に日本を離れました。第23期研修生もまもなく来日します。

◆労働組合の皆さん、ありがとう

04年度も自動車総連の組合員の皆さんから福祉カンパ特別寄贈をいただきました。また今年度は日本労働組合連合会の皆さんからも「連合・愛のカンパ」をいただきました。研修生も研修旅行の道中に、自動車総連・連合の本部、トヨタ、スズキ、ヤマハ、ダイハツの各組合の皆さんのところもお訪ねし、ご報告とお礼をさせていただきました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第23期研修生紹介（４月上旬来日予定）

▼ トゥンティンティさん（33才、男性、ビルマ）

宗教：仏教
言語：ビルマ語
主な研修テーマ：有機農業、協同組合、保健衛生

タダインシェ村から６人目の研修生です。中学時代から家の農業を手伝い、ティンアンウィンさん（92年度）の勉強塾の生徒です。

▼ ロナルドさん（26才、男性、フィリピン）

宗教：キリスト教
言語：タガログ語、英語、イロカノ語
主な研修テーマ：有機農業、農産物加工、協同組合、保健衛生

毎年３月の比較研修旅行で訪れるガバルドンから６人目の研修生。昨年は台風の影響で家屋、田畑が水害に遭いましたが、有機農業での収入増を目指しています。

▼ マスラルさん（30才、男性、インドネシア）

宗教：イスラム教
言語：インドネシア語、ミナン語
主な研修テーマ：有機農業、協同組合、保健衛生

西スマトラ州タベ村から７人目の研修生。妻、２才の息子の３人家族。堆肥を使った土作りや家族計画にも関心があります。

○月×日のPHD協会

この事務所では節約はいつものこと。でも毎日そればっかりでは…ということで、今回は「ここは豊かに」と思っていること、やっていることについて。

職員　藤野　モノを買う時に衝動買いせずに、本当に欲しいのかよーく考えること。気に入ったものと長く大事に付き合うための慎重さ。

職員　納堂　研修生と一緒に合成洗剤類の害を学ぶ。食器洗い、風呂洗い、洗濯、洗髪、歯磨きに純石けんのもので統一。体にも環境にも○。

職員　寺田　大切にしているのは４尾の金魚へのエサやりタイム。研修生が行事でもらってきたのを引き取って。毎朝の数分が心の平安を。

職員　古本　職場におけるみんなとの会話。量もさることながら中身、内容を大事にしたい。世の中で起こっていること、大切にしたいこと、などなど。

職員　佐々木　肝機能を高め、尿酸値を下げるというウコンには投資を惜しまない。東京にある沖縄料理屋のオヤジに勧められたのが５年前の夏。

国内研修生　佐藤　フツーの人は、タオルを使う。けれど私は手拭いが好き。かさばらず、すぐ乾く。反物買って、切って使えば安いし、時には刺繍も。

職員　芳田　両親と離れて住むようになって７年。月に一度の来訪時の夜更けまでの対話は大切。お酒をお伴に時には激論にもなるいい関係。

2005年 夏のスタディツアー

＜訪問予定先＞
▼ビルマ：７月下旬（約10日間）
約20万円
▼フィリピン：８月上旬（約10日間）
約16万円
▼インドネシア：８月下旬（約10日間）
約18万円

定員はそれぞれ13名。詳しい日程、参加費は５月頃に決定致します。お問合せ、お申し込みは事務所までお願いします。

なお、今年３月に予定していたパプア・ニューギニアへのスタディツアーは、カウンターパートの都合により、延期となりました。次回の予定が決まり次第、ご案内致しますので、ご了承下さいますようお願い致します。